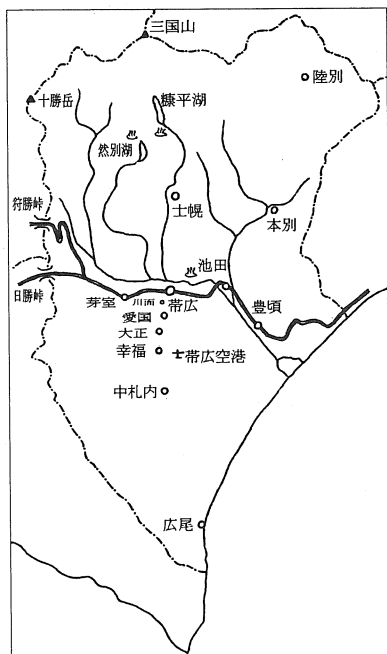




農業王国 北海道十勝 の開拓といも

帯広観光ボランティア
ガイドの会

会長 太田 昇



1. 6月の十勝野

6月下旬、十勝平野は農作物の成長期です。落葉松の林に囲まれ、一区画が4～5ヘクタールの広い畑では淡緑色のコムギが、早いものはすでに収穫し、またぐんと背伸びをしてまさに穂を出すばかりになっており、ビート（テンサイ）は畦の間がやっと見えるくらいまで柔らかい大きな葉をひろげ、ジャガイモは花の時期には少し早いものの、つぼみをもちあげてきています。茶褐色に見えるところはマメ畑でまだ生育をはじめて間もなく、そのなかでも大きいのはインゲン、小さいのはアズキです。ジャガイモの畑ではトラクターが薬剤を散布し、マメ畑では数人の女性がホー（除草ぐわ）で草取りをしています。広い十勝では農作業はほとんどが機械化されているものの、人力を必要とする作業もあって、あらためて農を営む苦勞がわかります。

これらのほかに大きなロールケーキのように巻いた牧草が積まれ、黒いビニールシートがかけられています。これは乳牛の飼料で、十勝は畑作生産のほか酪農業も盛んなところ です。

帯広空港の近くに見えるおとぎの国はグリュック王国とよばれ、広い敷地にはグリムの家、白雪姫の家、パン焼き小屋、ホラ吹き男爵の噴水、ブレーメンの粉ひき風車など、子供たちの夢をさそう童話の世界がひろがりますが、このほかにもヨーロッパ中世の手工芸品である家具・陶器・楽器づくり、パン焼きなどの手造りが実演され、またコンサートも催され、広い遊園地、それに豪華な古城を思わせるホテル、簡素な木造の休暇村など宿泊の施設も整っており、子供たちばかりでなく大人にも少年少女時代にもどったような、なつかしさを誘う施設です。

十勝地方は岐阜県に匹敵する面積をもち、

畑作物・酪農の生産高は日本一の、まさに農業王国の観があり、同じ北海道でも石狩・道南などの農業が以前にくらべてかならずしも盛んでない今、その価値を認める声はますます高まっていますが、この王国も決して平坦な道をたどって建設されたものではありません。そこには明治維新以後この地の開拓に携った先人たちの、血のにじむ苦労があったことを忘れてはならないでしょう。以下開拓の苦労について少し述べてみたいと思います。

2. 開拓の苦労

維新後蝦夷^{えぞ}は北海道とあらためられ開拓使が置かれ、土族移民・屯田兵^{とんでん}によって開かれたことはよく知られていますが、これらは札幌をはじめ道南・道央がほとんどであり、十勝への入植はありません。十勝の開拓は晩成舎・興復社など会社組織が先鞭をつけています。

伊豆出身の依田勉三^{よだ}は慶応義塾で福澤諭吉の教を受け、旧名古屋藩の渡辺 勝、旧松本藩の鈴木銃太郎^{じゅうたろう}と知り合い、新天地を開くことで一致して晩成舎（大器晩成の意）を創立し、明治15年（1882）十勝を調査して開拓の拠点を下帯広に決め、移民13戸が海路と陸路に分れて翌16年に帯広に到着しましたが、このときの十勝は太平洋岸の漁場以外は全くの未開地でした。その開拓は苦難の道で到着早々野火が発生して住民をおびやかし、食物は欠乏して野草・魚で飢えをしのぐ状況で早くも3戸が姿を消し、さらに天を覆うようなバッタの大群が襲来して作物はすべて食い尽くされ、そのうえ夏季間は猛暑が続いて蚊・ぶよなどの害虫に苦しめられ、マラリアが発生し、9月はじめに初霜が降り食糧に窮するなどで、

初年度30町歩（30ヘクタール）開墾の計画は僅かに3町足らずの成果しかありませんでした。このような困難が続いて大器晩成を理想に掲げた晩成舎は結局失敗に終わっています。これは不便な奥地で立地条件を無視した計画にもよりましようが、そればかりでなく移住民間に協調を欠いていたことも大きな理由でしょう。鈴木銃太郎・渡辺 勝はともに早々と他に移ってしまい、のち依田も他に牧場をつくりました。しかし依田の晩成舎は後進に宝のあり場所を示したようなもので、帯広市にある彼の銅像には次のような碑文があります。「依田勉三——伊豆の人。明治十五年晩成舎を組織して移住、凶歳相次ぎ飢寒身に迫るといえどもあえて屈せず、移民を慰撫激励し更に水田を開き酪農を興し、諸種の製造工業を試み、十勝国開発の礎をきずいた。岐阜県人中島武市私財を投じて之を永遠に讃へんとす。紀元二千六百年二月十一日建之 功業不磨」（注：紀元二千六百年一昭和15年—1940）

一方、二宮尊徳の孫二宮尊親^{たからか}は福島県相馬の旧藩士たちと興復社を設立して農村振興に努力しましたが郷里ではうまくゆかず、北海道に新天地を開こうとして明治29年（1896）7月に十勝に到着、肥沃で未開の平地である豊頃^{とよころ}を検分してここを開拓地と定め、翌30年から34年まで福島県から厳選された移民152戸が入植しました。1戸に5町歩を配当し、開墾地1反歩（0.1ヘクタール）につき3年目より2年間は50銭、以後13年間は70銭の割で報徳金を納めると5町歩の自作農として独立できる契約を結びました。

晩成舎が失敗し、興復社が成功した理由は前者が資本を持たない、豊かでない人たちが多かったのに対して、後者は資力体力人格と

もに選ばれた人たちであったことに加え、自作農となる契約があったこと、移民の自主安定という目標があったこと、が大きいと思われます。

入植当初は開墾とともに食糧確保のためにいろいろの作物を植えなければならない、ダイズ・アズキ・キビ・アワ・トウモロコシ・ソバ・カボチャ・ジャガイモなどがつくられましたが、これらのうち天候にあまり関係なくよい収穫をあげたものはソバとジャガイモで、マメ類は年による豊凶の差がはなはだしかったようです。

こうして苦勞して生産された農作物もなかなか売るところがなく困りました。初期の入植が多く失敗した理由の一つもここにあったようです

3. 十勝ジャガイモの歩み

明治以前にもコムギ・ダイコン・ジャガイ



モ・ソバなどが主として道南地方でつくられていましたが、寒冷な北海道での本格的な農業は内地府県で行われてきたそれとは全く異った考えで進めなければなりません。明治2年(1869)に開拓使が置かれてからはケプロンをはじめとする外国人が招へいされ、気候がよく似ているアメリカ合衆国その他から各種作物の種苗がとり寄せられ、また農業の試験研究機関も設けられました。

十勝は夏に気温が上りますが府県の低地のように酷暑とはならず、昼夜の温度差があり、また適度に雨も降るため内地では作りにくいジャガイモ・マメ類・ビートなどがよく育ち、また家畜を飼うにも適しています。ジャガイモは開拓のはじめからつくられていましたが、どのような天候の年にも間違いなく収穫できるので、開拓者の大切な食糧として年々栽培面積と生産量が増えてゆきました。

大正3年(1914)に勃発した第一次世界大戦のときには、ヨーロッパ諸国が自国での生産が思うようにゆかなくなったり、交戦相手国からの輸入ができなくなったりしたために、日本産のジャガイモでん粉が遠く欧州に多量に輸出されるようになりました。そのために十勝をはじめ道内各地でジャガイモの栽培が急に増え、それまでに開かれた農地ばかりでなく、新らしく造成された畑でも生産されるようになりました。

この頃ジャガイモでん粉ばかりでなく、食糧としての青エンドウ・インゲンマメ、軍需品の亜麻の輸出も急増し、これら作物を生産した人たちは大いにうけ、いわゆる「成り金」ができました。

好景気で開墾が進み、改良された農機具が普及するようになり、十勝の農業発展の大き

なきっかけとはなりましたが、特定の作物だけをつくって利益を追求した結果として掠奪農業が行われることになり、大戦が終ってヨーロッパ諸国が復興しはじめると、高価で販売されていたジャガイモでん粉その他の農産物の価格は暴落し、畑は荒れ、離農する者が続出したとあります。

戦後の経済不況が長く続き、この間十勝ばかりでなく全道的にコメの凶作が続いたために道当局は農業合理化方針を策定し、農業振興と農家経営確立をはかっています。昭和年代になってから6、7、9、10年と続いてコメが凶作で、ジャガイモが安全な作物であるとの認識が一層高まって、大正10年頃から停滞気味であったジャガイモの生産が昭和8年頃より次第に増え、昭和12年（1937）には第一次大戦の最盛期に迫る面積に拡大しましたが、丁度この年日華事変が勃発し、つづいて太平洋戦争へと展開してゆくに従ってでん粉のほか、アルコール原料など工業用としての需要が増え、また食糧としての重要性もさらに高まり、戦中をとおして生産の増強が叫ばれました。また府県でジャガイモの生産が増えるに従って北海道産の種いもが送り出されましたが、種いもは遠く朝鮮・満州（当時）にも輸送されています。

太平洋戦終戦後もでん粉原料・食糧・種いもとしての重要性は一層高く、栽培面積も変わらず経過しています。この頃道内でもっとも多く生産されたのは上川で、つづいて網走、十勝、後志、宗谷、空知、渡島の順になっていて、十勝は全道の10%の生産をあげています。

昭和40年頃から北海道ばかりでなく全国的に野菜・果樹などの生産が盛んになり、それ

▼コーヒーカップ「ポテトくん」



につれてジャガイモは次第に減ってゆきますが、面積あたりの生産が高くなったために全体の生産量に大きな変りはなく経過しています。平成6年（1994）には生産量で十勝は約100万トンと、全道生産量の39%を占め第1位、また全国の29%のシェアを得ています。ちなみに年次は異なりますが平成4年（1992）にはビートが全国（すなわち全道）の43%、コムギで全国の25%、マメ類で同じく16%となっていて、まさに農業王国十勝の面目躍如といったところです。

4. 愛されるジャガイモ

帯広をはじめ十勝の人たちはほんとうにジャガイモに親しみを感じ、愛しています。道都札幌と帯広を結んで1日5往復する十勝バスは「ポテトライナー」の愛称をもち、ジャガイモを模してつくった小さなコーヒーカップ「ポテトくん」は笑い顔あり澄まし顔ありで微笑ましく、思わず声をかけたくります。ジャガイモを使ったお菓子も「子福長者」「ジャガイモ甘納豆」ほかいろいろあり、そのほかにポテトコロッケ・ポテトサラダ・いもなます他の名物料理を市内外の各所で味わうことができます。

最近経済の向上にともなって、以前のよう

に自宅での調理がこの十勝でもだんだんと少なくなってきた、かわりに加工品が多く使われるようになりました。ジャガイモはビタミン・ミネラル・食物せんいを多く含んでいるすばらしい食品としてその真価が見直されていますが、どのような形であっても多くの人に愛されて食べられるのはとても素晴らしいことと思います。

男爵・メークインと、ジャガイモには優雅な名前がついています。この2つの品種は日本を代表するものですが、北海道農業試験場が中心となっていままでに食用・でん粉用・加工食品用の品種の改良が長年にわたり行われ、それぞれに向いた多くの品種が世に出てきています。食用ジャガイモの世界ではまだなじみがうすいのですが、レッドアンデス・とうや・キタアカリ・ベニアカリ・ホッカイコガネなどは、それぞれサラダ・ベークドポテト・スープ・コロケ・フライなどの料理をつくるのに向いています。いままではどんな料理にも男爵とメークインが使われてきましたが、おいしいジャガイモ料理を味わうためにこれら新しい品種が広まることがのぞまれます。そしてジャガイモがますます私どもに愛され親しまれる存在となることを願ってやみません。

十勝で年間生産される100万トンのジャガイモはその約半分がでん粉製造に、20%が加工食品用に、そのほか食用種用となりますが、貿易の自由化によってとくにでん粉製造業・食品加工業などは外国製品と競争しなければならず、経営を合理化するなど対応を迫られています。なかなか難しそうです。いままででん粉用として使われていたものを、加工食品用に切り換えて需要を呼び起そうとの努

力がされていて、新らしく加工工場が進出すること、農業協同組合での新しい加工食品の開発、などに期待がかかっています。

5. 十勝のナガイモ

ジャガイモの陰にかくれてはいますが、ナガイモもまた十勝の特産品として注目を集めています。昭和30年代終りごろ日本農業が外国からの農産物の影響を受けるようになってから、とくに中小規模の農家に有利な作物をとり入れて経営安定をはかる必要に迫られました。

数々の野菜類が試作されましたが、そのなかでナガイモがこの地の気候土壌に合っていて、よい品質のものが生産されることがわかりました。はじめに帯広市を中心として出荷されましたが、そのうちに関西市場での評価が高まってきましたので収穫機の導入をはか



▲ナガイモの畑

るなど、増産体勢を整えました。

ジャガイモではウイルス病防除のためによい種いもをつくる体系がとられ、十勝にも帯広市幸福町に農林水産省種苗管理センター十勝農場が設けられていることは農業関係の方々にご存じのことですが、ナガイモでもウイルス病の害がひどく、ジャガイモと同じ考えて病気のない種いもをつくり、これを使うことが大切です。そこで帯広川西農業協同組合が中心となって種いもの生産をはかるとともに、栽培技術の研究にも取り組みました。これらの努力が実り、昭和50年代から品質のよいナガイモが沢山つくられるようになりました。いまでは他の数農協も加わって「川西長いも運営協議会」を結成し、年間をとおして出荷されています。

ナガイモにはたくさんの栄養素が含まれていておいしく、また長い間保存・貯蔵しても変質しないすぐれた野菜で、ジャガイモといっしょにこれから多くの家庭で愛用されることを願っています。

6. 暮らしにうるおいを添える花

7月上旬、十勝のジャガイモ畑は紫あるいは白の、美しい花のじゅうたんにかわります。ジャガイモの花はひとまとまりに咲き、近寄ると甘酸っぱい、やや野性的な香りもしてほんとうに美しいものです。ルイ十六世時代のフランスで王妃マリー・アントワネットが髪飾りにジャガイモの花束をさしてパーティーに臨んだ話は有名ですが、当時はこの美しい花が作物としてのジャガイモを広めるために大へん役立ちました。

日本で見るジャガイモの花はほとんどが白か紫ですが、野生のものにはこのほかに赤・

黄・淡青などたいへん美しいものがあります。時代が変り今日このジャガイモを、花を觀賞するために育てたら、との発想が生れてきました。花が大きく、より美しく、長い間咲き続けたら十分価値のあるものになります。十勝農業協同組合連合会ではこのような特性をもつジャガイモをつくり出す努力を積み重ねてきましたが、赤色の新品種「エスペランサ・ローハ」の育成に成功し、新品種として登録され、もう一つ紫色の「エスペランサ・ビオレータ」も現在登録手続中です。

美しいジャガイモの花が初夏の十勝野を彩るだけでなく、家庭、職場などを明るくし、長い冬の暮らしを楽ししいものにしてくれることでしょう。

編集後記 大きな手のひらをすぼめたような葉の間からひときわ高く茎を伸ばしてカンナが真赤な花をひらきはじめました。ダリアも競うように咲き狭い庭が赤い花で埋めつくされ、温度計が上るにしたがい一層暑さが酷しく迫ってきます。じっとしていても汗がにじみ出る夏、クーラーのきいた部屋に逃げこみたいのを我慢して表に出ると、草いきれの中から虫の声がきこえてきます。一服の涼を感じ、夏休みを待ちこがれた幼い頃が思い出されます。

いも類振興情報 第52号

平成9年7月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152

印刷所 JTB印刷株式会社